

北白川追分町遺跡のドングリ集積遺構の炭素14年代

富井 眞

1 はじめに

2002年度の京都大学北部構内BD28区の発掘調査で、ドングリ集積遺構が検出された〔文献8〕。検出層準では土器が出土しなかったため、帰属時期については、上下の包含層出土遺物から、縄文時代後期後葉の元住吉山Ⅰ式から晩期末の滋賀里Ⅴの間にまでしか絞れなかった。しかし、懸案だった堅果類の放射性炭素年代測定を昨年度に実施できたので、ドングリ集積の年代値を報告し、その年代値のもつ意義について若干の考察をおこなう。

2 年代測定試料について

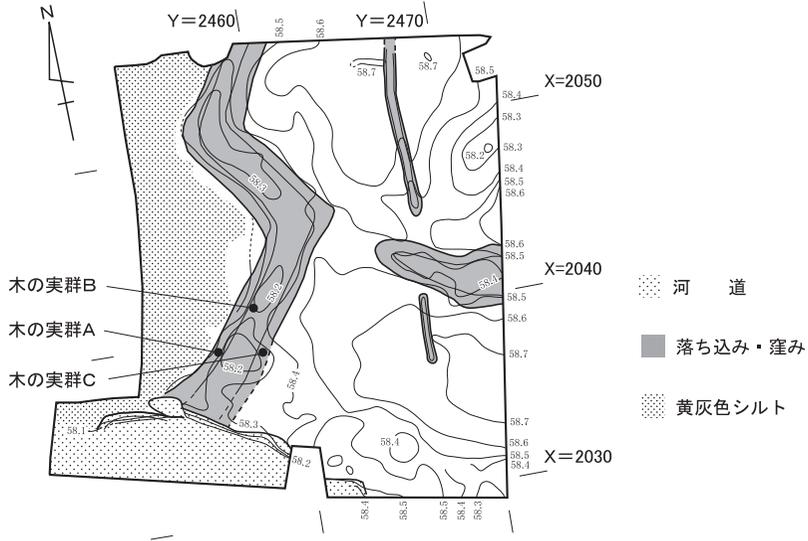
(1) 出土状況 (図112・113)

縄文後晩期のドングリ集積が検出された京都大学北部構内BD28区は、北白川追分町遺跡の西南辺に位置する (図版1-297)。今は東山沿いを南流する白川は、先史時代には白川扇状地の中央あたりを西流することが多く、ドングリ集積も、そうした白川の水成堆積相に覆われた腐植土層の掘削中に確認された。第297地点 (文中に示される地点番号は、図版1の番号に対応する。以下、「第」を省略する。) からは、大小合わせて4箇所ドングリ集積が検出され、もっとも規模の大きい1基 (SX5) が泥炭質土Ⅲに帰属するほかは、いずれも泥炭質土Ⅰで確認された〔文献8〕。

SX5については、以下のように報告されている。「SX5は、泥炭質土Ⅲやその下位の淡黄色細砂の掘削中に検出したドングリの集積遺構である。掘方は検出時は確認できなかったが、種実の除去時に、東側に立ち上がり確認できた。共伴遺物はなく、この周辺のみならずこれらの層からは人工遺物も木の実も出土していない。完存している種実は300点ほどで、分解が進んでいるものや破砕しているものもあわせると600点ほどになる。トチノキの種子1点およびクヌギないしアベマキの果実1点を除くと、残りはすべてイチイガシである。この数量でありながら、調査区では堅果類がほとんどまったく確認されておらず、また集積遺構に幼果や殻斗が存在しないので、人の手によることは間違いなからう」〔同：210-212頁〕。年代測定試料は、このうちのトチノミ1点とイチイガシ1点である。泥炭質土Ⅰで検出された3つの集積 (木の実群A~C) については、泥炭質土Ⅰ自体は、

北白川追分町遺跡のドングリ集積遺構の炭素14年代

〔木の実群A～Cのおよその位置と泥炭質土 I 上面の地形〕



〔SX5の位置と泥炭質土 II・IIIの分布〕

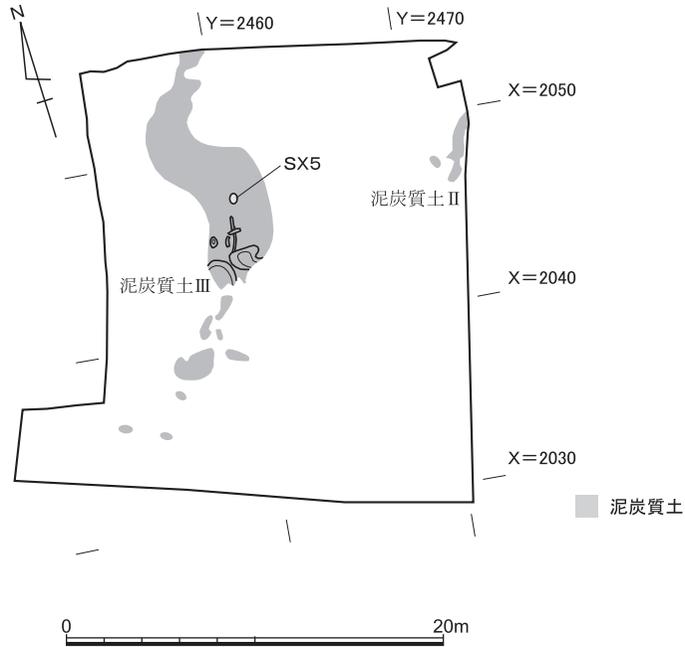


図112 297地点の測定試料の出土状況 (縮尺1/400) 文献8を一部改変

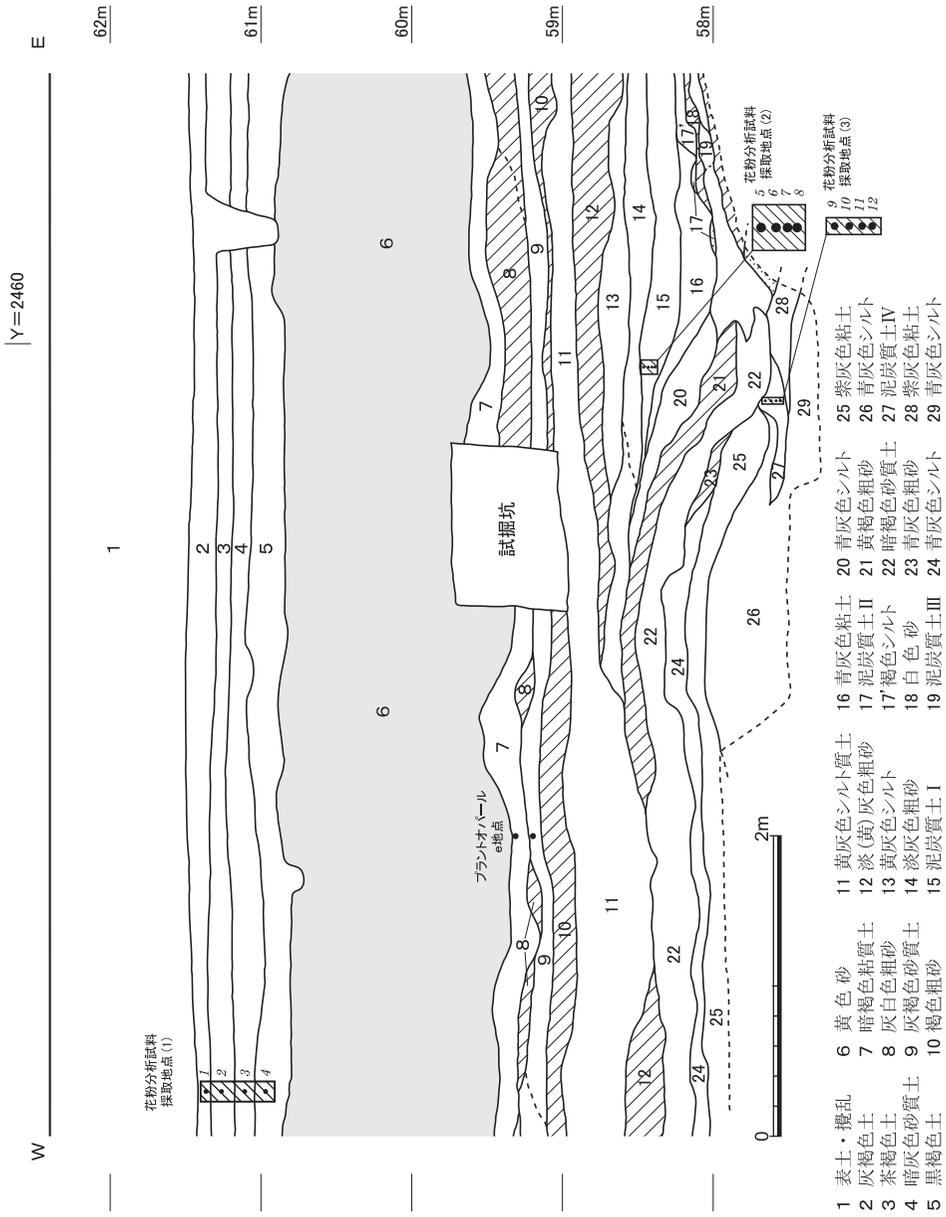


図113 297地点の基本層位 (縮尺1/50) 文献8より転載

厚さ数十cmの砂層に覆われているが、木の実群はいずれも泥炭質土の掘削中に検出された。そして、以下のように報告されている。「5 cm四方ほどの広がりの中に、殻斗や幼果を含まずにイチイガシ10点前後が集中して出土したところが3箇所ある。いずれも、南北方向の落ち込みの南半に位置していた。このうちのひとつは、半数以上のイチイガシの上部がつぶれていた。泥炭質土 I では、ドングリはほとんど出土せず、幼果や殻斗も一点も確認できなかったが、まとまりの点数が少なく、掘り込みも見られなかったので、発掘時には、野ネズミなどによる堅果類の分散貯蔵を想定して地点を記録せずにいた。しかし後日、南木睦彦氏から、この泥炭質土中に幼果や殻斗が検出されていないことと、ドングリの頂部がつぶれたようになっているものが多いことなどから、これらの集中部はいずれも、廃棄か一時的集積かは判断できないもの的人為的産物の可能性もある、との御教示を得た」〔同：212頁〕。上部のつぶれたものが半数以上を占めていたのは木の実群 C である。木の実群 A～C については正確な座標を測量していないが、それぞれは3～5 m程度離れている。年代測定試料は、木の実群 C のイチイガシ 1 点である。

(2) 保管状況と年代値

測定試料 3 点はいずれも、2002年12月に発掘現場から回収し、2003年3月までには付着していた泥などを水道水によって洗浄した。洗浄後はすぐに、その他の木の実と同様にエチルアルコール溶液を含ませた脱脂綿で覆った状態で、タッパーウェアの中に収めた。そして、常温で地下倉庫に約9年間保管していた。その後、2011年秋に、懸案だった年代測定を実施しようとしてその直前に試料の状況を確認したところ、S X 5 出土のイチイガシを収めていたタッパーには、アルコール溶液が残存して試料も原形を保っていたが、その他の2点は、タッパー内が乾燥しており、木の実自体が収縮していた。これら3点を、2011年秋から冬にかけて(株)加速器分析研究所で年代測定した。

3 点の試料の年代値(表6)によれば、ドングリ集積 S X 5 の年代は、炭素13濃度測定を経て調整された値では、 $3024 \pm 27 \text{ B P}$ (未調整の値で、 $3030 \pm 30 \text{ bp}$) および $3006 \pm 20 \text{ B P}$ (同、 $3030 \pm 20 \text{ bp}$) であり、木の実群 C の年代は、 $2921 \pm 22 \text{ B P}$ (同、 $3010 \pm 20 \text{ bp}$) である。これらの値は、年代較正曲線による補正をする前のものである。なお、エタノール溶液で保存したものにたいする放射性炭素年代測定について、加速器分析研究所員からは、以下のような趣旨のコメントをもらっている。エタノールは揮発性なので、有機質による処置を施すという点では同じ範疇になるバインダーやポリエチレングリコールの場合とは異なって、年代にそんなに大きな影響を及ぼすことはないと思われる。

3 考 察

これらの年代値を、近年に蓄積の進んでいる近畿地方の縄文土器型式の年代値に照らすならば、後期後葉の宮滝式よりは新しく晩期後半の突帯文土器よりは古い頃、に対応させられよう。つまり、木の実群CとSX5の2つのドングリ集積の帰属時期は、ともに、およそ縄文晩期前半頃、土器型式でいえば、滋賀里I式から滋賀里Ⅲb式（篠原式）までにおさまる時期、と判断できる。

そして、木の実群A～Cでは上部に人為的な削平を認められないことから、木の実群Cのドングリの年代値は、その検出層準の堆積年代の目安となる。すなわち、泥炭質土Iは 2920 ± 20 B P（未校正）頃に堆積過程にあったと言える。また、SX5の年代値は、泥炭質土Ⅲの堆積開始がそれより古いことを示すので、花粉分析された泥炭質土Ⅳの堆積時期も元住吉山式の時期から 3030 ± 30 B P（未校正）頃までの間におさまることになる。さらには、泥炭質土Iの堆積年代がこのように推定できたことによって、泥炭質土Iを覆った砂層の堆積時期も、滋賀里I式から滋賀里Ⅴの間に絞り込むことができる。

これらの時期比定は、北白川追分町遺跡における縄文時代後晩期の環境変化や土地利用に関するデータとして、重要な意味を持つだろう。以下では、北白川追分町遺跡内の他の調査地点や北白川追分町遺跡周辺の同時期の様相に照らしながら、297地点のドングリ集積の測定年代値の意義などについて、若干の考察をおこなう。

(1) 周辺地点の縄文晩期頃の放射性炭素年代

これまで、北白川追分町遺跡の発掘調査で得られた縄文晩期頃の試料の放射性炭素年代について、表6にまとめた。年代値については、未校正の測定値なのか校正後のものなのか、不明瞭なものもある。また、1990年代頃からの加速器質量分析法の導入によって、微量の試料でも短い時間で測定が可能になったことをうけて、木の実や葉や土器付着炭化物などを試料にすることも可能となっているが、それ以前は、比例計数管法や、液体シンチレーション法による測定であった⁽¹⁾。

まず、土器付着炭化物の年代推定値を見よう（図114）。いずれも外面付着である。調査時期が比較的古い試料については、バインダー処理の有無が不明なものがあるが、試料の年代値を確認しておけば、滋賀里Ⅲb式の口縁部破片では、 2760 ± 40 B P（表6の11番）、滋賀里Ⅲb式ないし滋賀里Ⅳ式の肩部破片では、 2640 ± 50 B P（同19番）、滋賀里Ⅳ式の口縁部では 2660 ± 50 B P（同18番）、船橋式と報告されている滋賀里Ⅴの口縁部破片では、

北白川追分町遺跡のドングリ集積遺構の炭素14年代

表6 北白川追分町遺跡における縄文晩期前後の放射性炭素年代測定

地点番号と報告記載層位	帰属土器型式	試料
1 297地点第15層 (泥炭質土Ⅰ)	元住吉山Ⅱ～滋賀里Ⅴ	イチイガシ
2 297地点第19層 (泥炭質土Ⅲ)	元住吉山Ⅱ～滋賀里Ⅴ	イチイガシ
3 297地点第19層 (泥炭質土Ⅲ)	元住吉山Ⅱ～滋賀里Ⅴ	トチノミ
4 56地点第21層 (泥炭質層2上)	船橋 (滋賀里Ⅴ)	木W16 (ムクノキ)
5 56地点第21層 (泥炭質層2上)	船橋 (滋賀里Ⅴ)	木W16 (ムクノキ)
6 56地点第21層 (泥炭質層2上)	船橋 (滋賀里Ⅴ)	土
7 56地点第21層 (泥炭質層2上)	船橋 (滋賀里Ⅴ)	土器口縁外面付着炭化物
8 56地点第23層 (泥炭質層2下)	船橋 (滋賀里Ⅴ)	木
9 56地点第23層 (泥炭質層2下)	船橋 (滋賀里Ⅴ)	土器口縁外面付着炭化物
10 56地点第26層 (泥炭質層3中)	滋賀里Ⅲb～船橋	土
11 56地点第28層 (泥炭質層3上～4)	滋賀里Ⅲb	土器口縁外面付着炭化物
12 56地点第28層 (泥炭質層4)	滋賀里Ⅲb	木W45 (カヤ)
13 56地点第28層 (泥炭質層4)	滋賀里Ⅲb	木W41 (カエデ属)
14 56地点第28層 (泥炭質層4)	滋賀里Ⅲb	木W41 (カエデ属)
15 56地点第28層 (泥炭質層4)	滋賀里Ⅲb	土
16 56地点第33層 (青灰色シルト1) 上面	北白川C～滋賀里Ⅲb	木
17 56地点第33層 (青灰色シルト1)	北白川C～滋賀里Ⅲb	木
18 135地点第15層 (黒色土4) SK3	滋賀里Ⅳ	土器口縁外面付着炭化物
19 229地点第22層 (泥炭質土3) SX4付近	滋賀里Ⅲb～滋賀里Ⅳ	土器胴部外面付着炭化物
20 355地点第32層 (オリーブ灰色粘土)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
21 355地点第32層 (オリーブ灰色粘土)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
22 355地点第33層 (腐植土Ⅰ)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
23 355地点第33層 (腐植土Ⅰ)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
24 355地点第33層 (腐植土Ⅰ)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
25 355地点第33層 (腐植土Ⅰ)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
26 355地点第38層 (腐植土ⅠB)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
27 355地点第42層 (青緑色粘土)	長原 (滋賀里Ⅴ)	土器口縁外面付着炭化物
28 355地点第43層 (腐植土Ⅱ)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
29 355地点第43層 (腐植土Ⅱ)	長原 (滋賀里Ⅴ)	土器口縁外面付着炭化物
30 355地点第43層 (腐植土Ⅱ)	滋賀里Ⅴ	種子
31 355地点第43層 (腐植土Ⅱ)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
32 355地点第43層 (腐植土Ⅱ)	滋賀里Ⅴ	アヲ穎果
33 355地点第43層 (腐植土Ⅱ下)	滋賀里Ⅴ	葉 (広葉樹)
34 355地点第45層 (紫灰色粘土)	滋賀里Ⅴ	葉? (小枝樹皮か)
35 355地点第45層 (紫灰色粘土)	滋賀里Ⅴ	種子
36 355地点第50層 (暗褐灰色粗砂質土Ⅰ)	元住吉山～滋賀里Ⅴか	樹皮
37 355地点第50層 (暗褐灰色粗砂質土Ⅰ)	元住吉山～滋賀里Ⅴか	樹皮
38 355地点第51層 (腐植土Ⅲ)	滋賀里Ⅴか	葉 (広葉樹)
39 355地点第59層 (腐植土Ⅳ)	北白川C～滋賀里Ⅴか	葉 (広葉樹)

考 察

表6 つづき

試料名	測定値	¹³ C補正值*1	報告掲載値*2	備 考	文献*3
IAAA-111121	3010±20	2921±22BP		エタノール漬け保存後	8/本文
IAAA-111120	3030±20	3006±20BP		エタノール漬け保存後	8/本文
IAAA-112067	3030±30	3024±27BP		エタノール漬け保存後	8/本文
KSU-304	2000±10		2000±10BP		1/1, 17
Gak-8425			2890±40BP		1/1
KSU-286	2340±15		2410±20BP		1/1, 17
MTC-07463			2410±50BP	バインダー処理不明	1/6
Gak-8426			3120±40BP		1/1
MTC-07462			2480±50BP	バインダー処理不明	1/6
KSU-287	2690±50		2630±60BP		1/1, 17
Beta-197017			2760±40BP	バインダー処理不明	1/1
KSU-282	2740±35		2750±20BP		1/1, 17
KSU-284	2740±30		2770±40BP		1/1, 17
Gak-8427			3240±40BP		1/1
KSU-288	2760±35		2770±40BP		1/1, 17
KSU-283	2780±25		2770±30BP		1/1, 17
KSU-299	2590±15		2760±35BP		1/1, 17
MTC-07460			2660±50BP	バインダー処理不明	4/6
MTC-07461			2640±50BP	バインダー処理不明	7/6
IAAA-93097	2650±30	2533±28BP	2533±28BP		9/9
IAAA-92468	2670±30	2570±32BP	2570±32BP		9/9
IAAA-92457	2550±30	2473±30BP	2473±30BP		9/9
IAAA-93095	2560±30	2490±30BP	2490±30BP		9/9
IAAA-92465	2630±30	2549±29BP	2549±29BP		9/9
IAAA-93096	2680±30	2592±32BP	2592±32BP		9/9
IAAA-92458	2610±30	2486±31BP	2486±31BP		9/9
IAAA-112065	2470±30	2504±26BP	2504±26BP	バインダー処理後	9/9
IAAA-92459	2580±30	2491±28BP	2491±28BP		9/9
IAAA-112066	2520±20	2513±23BP	2513±23BP	バインダー処理後	9/9
IAAA-102089	2550±30	2524±26BP	2524±26BP		9/9
IAAA-102090	2610±30	2525±26BP	2525±26BP		9/9
PLD-15416		2530±20BP	2530±20BP	13点を一括して測定	9/9
IAAA-102088	2610±30	2550±27BP	2550±27BP		9/9
IAAA-92460	2630±30	2567±30BP	2567±30BP		9/9
IAAA-92469	2730±30	2666±32BP	2666±32BP		9/9
IAAA-92462	2620±30	2561±27BP	2561±27BP	保存処理前の巨木樹皮	9/9
IAAA-92461	2670±30	2601±29BP	2601±29BP	保存処理前の巨木樹皮	9/9
IAAA-92466	2830±30	2723±31BP	2723±31BP		9/9
IAAA-92467	3020±30	2925±31BP	2925±31BP		9/9

*1 : 炭素13濃度測定により測定値を補正した値。

*2 : いずれも未校正の年代値。

*3 : 文献番号表記は、(遺跡事実報告/試料年代報告)としている。

2480±50B P (同9番), 2410±50B P (同7番), である。また, バインダー処理後での測定であることが明確なので参考値とするにとどめるべき試料としては, 滋賀里Vの口縁部破片で, 2504±26B P (同27番), 2513±23B P (同29番), である⁽²⁾。

以上から, 外面付着炭化物による放射性炭素年代測定に関する限りは, 滋賀里Vの型式細分については問題を残すものの, 滋賀里Ⅲb (未校正年代の中央値で2750B P頃) →滋賀里Ⅳ (同2650B P頃) →滋賀里V (同2500~2400B P頃) となり, 近畿地方の突帯文土器の変遷観が数値年代でも支持され得ることがわかる。しかし, こうした型式学的理解と数値年代との整合性の一方で, 北白川追分町遺跡での出土状況では, 滋賀里Vの中で船橋式と長原式は垂直層位として分離できてはいない。層位的関係が認められているのは, 56地点での滋賀里Ⅲb式と滋賀里Ⅳ式以降の突帯文土器〔文献1〕, そして56・135・180地点での滋賀里Ⅳ式と滋賀里Vである〔文献1, 4, 13〕。さらに, 加速器質量分析法によって測定された, これら晩期中葉以降の土器が出土した地層に包含されていた葉などの年代値を見てみると, 滋賀里Vの層準でも未校正年代中央値で2670B P頃になるものがあり (表6の35番), また, 滋賀里V併行と判断されているものの滋賀里Ⅳ式の可能性も残る土

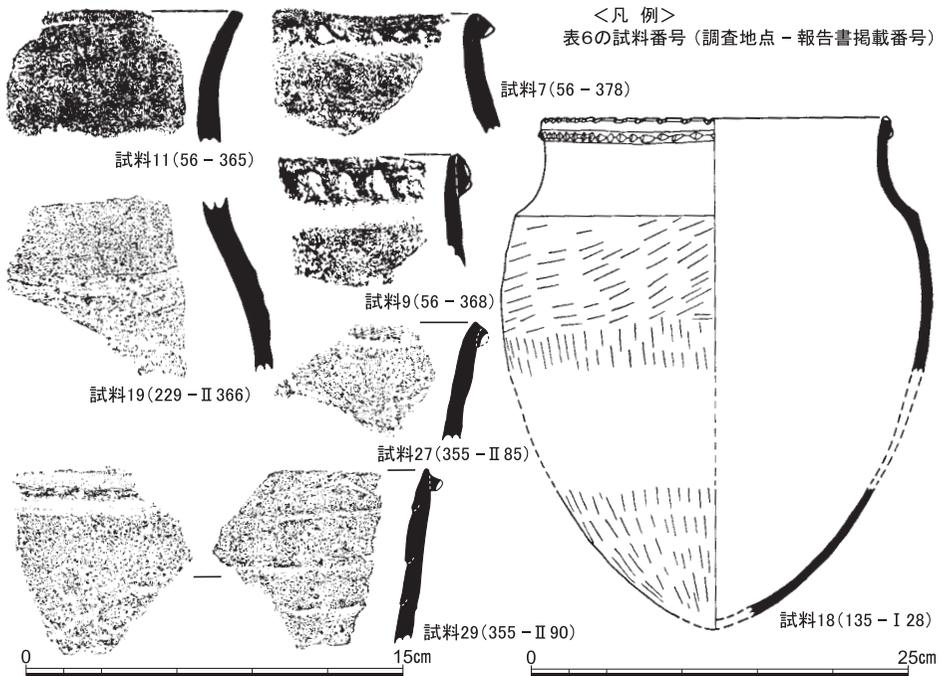


図114 付着炭化物の年代測定をした縄文土器 (縮尺1/3, ただし試料18は1/5)

器の出土した層準で、2720B P頃の未較正年代中央値をとるものもある（同38番）⁽³⁾。

つまり、少なくとも北白川追分町遺跡では、数値年代でも層位的関係でも、①滋賀里Vの細分は困難だが、②滋賀里Ⅲb式と滋賀里Ⅳ式と滋賀里Vの分離はおおよそ支持される。そして、③未較正年代中央値で2900B P頃になる層準は、滋賀里Ⅲb式よりは古いと判断し得る⁽⁴⁾。なお、未較正年代中央値で2520B P頃のアワ（表6の32番）とともに未炭化のイネ籾軸・籾殻が包含されていた地層が確認された355地点でも、同様にイネの籾殻が回収された56地点でも、その地層からは滋賀里Vは出土するが弥生土器は出土せず、弥生前期の土器の出土を見るのはそれより上位になってからであるが〔文献9，1〕、北白川追分町遺跡の弥生前期土器には、年代測定に十分な量の炭化物の付着を確認できるものがまだ無いので、直接的な年代測定ができていない資料状況にある⁽⁵⁾。

(2) 晩期前半頃の人間活動

北白川追分町遺跡における現在までの資料状況では、後期後葉の元住吉山Ⅱ式頃から晩期前半の滋賀里Ⅲa式頃までは、土器がほとんど出土していない。それゆえ、その時期の堆積層や人間活動痕跡をほとんど抽出できていなかったし、この時期の土器型式と放射性炭素年代との対応も、上記のような晩期後半のように進められない。しかし、今回のドングリ集積の年代値は、そうした資料状況に一筋の光明を与えている。

297地点のドングリ集積のうち、SX5は人為とみなすに十分な状況である。また、木の実群A～Cについても、規模や密度を根拠にすれば人為的な集積と認定するには躊躇される部分を残すものの、ドングリの遺存状況や形状からは人為の可能性も肯定し得る⁽⁶⁾。すなわち、晩期前半頃にもたびたび、堅果類の採集活動がこの地でおこなわれていた公算が大きい。そして花粉分析によれば、後期後葉以降で 3030 ± 30 B Pよりも古い時期から、晩期前葉にかかる 2920 ± 20 B P頃までを通じて、アカガシ亜属の花粉が多いことに加え、泥炭質土Ⅰではトチノキの花粉の比率が急増したときがあった〔文献8〕。泥炭質土ⅢのSX5にはトチノミが1点だけ残っていたことから、トチノキの花粉がさほど多くはないこの層準の頃にもトチノミが利用されていたことは確かだが、虫媒受粉のトチノキの花粉比率が急増した泥炭質土Ⅰでは、トチノミは包含層からほとんど出土していないので、トチノミが徹底的に回収された可能性もある。

297地点の周辺に目を転じて後期末から晩期前葉の資料を抽出すると、南方100mの209地点においては、上面が弥生時代前期末の土石流に覆われた土壌化層では、遺物量が限定的な中で、ほとんど摩滅していない宮滝式や滋賀里Ⅱ式が数点出土している〔文献14〕。

297地点の南縁では幅広い東西方向の白川系流路が検出されているが、その幅の水流が常時あったわけではないから、それが堅果類採集活動の障害になったとは思えない。遺跡名は異なるが南接する吉田本町遺跡の北辺にも未調査部分が多いので、後期末から晩期前葉の時期の活動地点が存在していた可能性を、北白川追分町遺跡という遺跡名称のおよぶ範囲だけでなく、297地点の東辺や南辺、さらには西辺に対しても意識しておくべきだろう。

なお、北北東約200mの229地点では、付着炭化物の未校正年代が 2640 ± 50 B Pの値となった滋賀里Ⅲ b 式ないし滋賀里Ⅳ式の破片（表6の19番）に近接して、トチノミ貯蔵穴（S X 4）が検出されている〔文献7〕。ここでは、その検出層準の泥炭質土（報告書では「腐植土」と表記している同様の地層）から多量の外果皮付きのトチノミが出土している。堅果類の採集が徹底的ではなかったと考えられるから、297地点での堅果類の利用戦略は、時期的に後出であるこの229地点でのそれと異なる可能性もある。

(3) 自然災害に関するデータ

297地点の調査では、泥炭質土Ⅰは、その分布の南縁を西流する白川系流路からの溢流によって厚い砂層に覆われており、調査区東辺では上方粗粒化がうかがえるので、縄文後期後葉～晩期後葉までの時期に297地点一帯が洪水に見舞われたことが指摘された。さらに、その洪水性堆積物では、粗砂には水成堆積の構造を保っていないでラミナが認められない部分があり、細砂にはラミナが褶曲したような観を呈する部分があること、また、泥炭質土Ⅰの上面にはその細砂が陥入したような地割れ状の細い裂け目が認められること、そして、粗砂の堆積後に断層状の地層変形が生じていたこと、以上から、洪水後ほどなく大地震が発生したことも指摘された。そしてその地震については、京都盆地の中で北東に位置する北白川追分町遺跡とは対照的位置関係の西南部に位置する向日市石田遺跡〔文献10〕や、比叡山地の西側に位置する北白川追分町遺跡とは反対の比叡山地東側の滋賀県北仰西海道遺跡〔文献5〕で痕跡が確認されている、滋賀里Ⅲ b 式頃の大地震との関連が有力視されていた〔文献8〕。

今回、泥炭質土Ⅰが、2900 B P頃には堆積過程にあったことが判明したので、洪水や地震の発生時期は、後期ではなく晩期に絞れよう。そして大地震については、滋賀里Ⅲ b 式頃のものである可能性がさらに高まった。その場合、北仰西海道遺跡では、滋賀里Ⅲ a 式の成立よりは新しい可能性が高く滋賀里Ⅲ b 式の終焉以前だから〔文献12〕、発生の数値年代は、本章第1節で示した北白川追分町遺跡における土器型式と数値年代との対比にも照らせば、未校正年代中央値で、2900 B P～2750 B P頃ということになるだろう。

4 おわりに

297地点で検出されたドングリ集積の放射性炭素年代測定の結果報告をおこなった。この年代値は、これまで実態を推測しづらかった縄文晩期前半頃の北白川追分町遺跡における、自然環境や人間活動に関する情報の年代的な根拠を与えてくれた。今後も、特に共存遺物の不明瞭な遺構や層準の年代測定を蓄積していけば、先史時代の北白川の自然的・社会的環境について、さらに踏み込んだ解釈を提示できるようになる。

〔注〕

- (1) 表6で、試料番号が、G a kで始まる試料は学習院大学でアセチレンを用いた比例計数管法で、K S Uで始まる試料は京都産業大学で液体シンチレーション法で、それぞれ測定された。
- (2) これらのバインダー処理済み破片は、ともに型式学的には長原式として細分されるのが通常である。なお、滋賀里式の細分呼称については、文献16を参考にしている。
- (3) 355地点では、加工痕のある樹幹に近接して第33層（腐植土Ⅰ）から出土した突帯文土器の破片と、第51層（腐植土Ⅲ）出土の突帯文土器の破片が接合しており（報告書掲載番号はⅡ3番）、それについて、突帯や調整や器形の特徴から、滋賀里Ⅴに併行する突帯文土器、という評価が与えられている〔文献9の131・243頁〕。しかし、肩部に突帯が無いことと口縁部突帯の貼付位置から判断すれば、滋賀里Ⅳ式に比定されても良い。その場合、第51層からは、滋賀里Ⅴは出土していないことになり、さらに、その上位の第50層（暗褐色灰色粗砂質土）も滋賀里Ⅴを含まない層準と理解できることになるから、355地点で滋賀里Ⅴが出土した層準で年代測定された試料のうちでもっとも古い未較正年代中央値は、2670 B P頃ということになる（表6の35番）。なお、この加工痕をもつ樹幹については、2箇所樹皮の年代測定をおこなっているが（同36・37番）、その後実施された樹幹のウイグルマッチ法によれば、最外部の樹皮の放射性炭素年代値はいずれも古過ぎることになるようである〔文献15〕。ウイグルマッチ法が原理的に循環論的な側面をもつことに起因する根源的な方法的課題、という可能性もあるが、「大木の外皮は年代が古くなる」〔文献3〕ことを明確に示す例とも言えるだろう。
- (4) 今では測定作業がおこなわれていない学習院大学でかつて測定された試料3点については、いずれも滋賀里Ⅲb式やそれ以後の層準のものだが、2900 B P頃やそれ以前の値を示している（表6の5・8・14番）。ただし、この機関でのこれまでの測定値では、他の遺跡の年代測定でも古い値を示すことがあった。56地点の測定でも、2種の試料でおこなわれた同一試料の別機関での測定で（同4番と5番、および13番と14番）、学習院大学での測定年代値は2種ともに、他機関での測定年代値よりもかなり古い値を示している。
- (5) 近畿地方の中でも河内など大阪湾岸域では、2500 B P頃の未較正年代中央値をもつ炭化物試料の付着した土器としては、長原式として細分された滋賀里Ⅴだけでなく、弥生土器も挙げられる〔文献6など〕。長原式と弥生前期土器との年代的関係は、同一系統の型式変化を検討するための論理体系である型式学的編年では解決できない問題だが、付着炭化物の放射性炭素年代値で比較しても、年代較正曲線の勾配が極めて緩い部分に該当するために、結論を導きにくい。さらには、イネの有無と土器の変化とは必然的な相関があるわけではないので、本来的には

切り離して考えられるべきテーマである。北白川追分町遺跡の場合、少なくとも現在までの資料状況では、①イネは弥生土器に先行して登場しており、②滋賀里Vには弥生土器を伴わない場合がある。なお、③弥生前期土器に滋賀里Vが伴わない場合がある〔文献2〕。

- (6) ドングリ集積の検出された297地点の報告では、泥炭質土中からは堅果類がほとんど出土していないのに集積箇所がある、と明記されているが、355地点の報告の考察では、「貯蔵穴周辺でも同種の堅果が多数出土した」〔文献9の241頁〕としている。355地点の考察には誤認がある。

〔参考文献〕

- 1 泉拓良・宇野隆夫編 1985『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ 一北白川追分町縄文遺跡の調査一』
- 2 伊藤淳史 2003「比叡山西南麓における縄文から弥生 一京都大学構内遺跡出土資料の紹介と検討を通じて一」『立命館大学考古学論集Ⅲ』
- 3 今村峯雄 2000「考古学における¹⁴C年代測定 一高精度化と信頼性に関する諸問題」『考古学と化学をむすぶ』（東京大学出版会）
- 4 京都大学北部構内B F 31区調査班 1987「北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 5 葛原秀雄 1989「北仰西海道遺蹟の地震跡について」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要 昭和63年度』
- 6 小林謙一・春成秀爾・坂本稔・秋山浩三 2008「河内地域における弥生前期の炭素14年代測定研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第139集
- 7 千葉豊・古賀秀策・富井眞・伊東隆夫・宮武頼夫・初宿成彦 1998「京都大学北部構内B F 30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 8 富井眞・吉江崇・伊東隆夫・外山秀一・上中央子 2007「京都大学北部構内B D 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
- 9 富井眞・伊東隆夫・金井いづみ・佐々木尚子・杉山淳司・高原光・辻本裕也・那須浩郎・藤井裕之・村上由美子・Mechtild MERTZ 2012「京都大学北部構内B H 31区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2009年度』
- 10 中塚良・清水みき 1992「長岡京跡左京第260・272次（7 AND I D - 2・4地区）」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第33集
- 11 西本豊弘 2009『弥生農耕の起源と東アジア 一炭素年代測定による高精度編年体系の構築一』（平成16～20年度科学研究費補助金 学術創成研究費 研究成果報告書）
- 12 濱 修 1998「地震考古学発祥の遺跡 一北仰西海道遺蹟一」『古代学研究』第142号
- 13 浜崎一志・千葉豊 1990「京都大学北部構内B D 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 14 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995「京都大学北部構内B A 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 15 村上由美子・メヒテル・メルツ・藤井裕之・坂本稔・遠藤利恵・中川正人・富井眞 2012「縄文時代におけるコナラ節の利用とその技術 一北白川追分町遺跡出土大木の検討から一」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』
- 16 家根祥多 1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』（雄山閣）
- 17 Osamu YAMADA and Akira KOBASHIGAWA, 1986, KSU Radiocarbon Dates I, *Radiocarbon* vol.28, No.3